

# 別役実「愛のサーカス」を読む

An interpretation of Minoru Betuyaku's "Aino Circus"

山本 欣司

YAMAMOTO Kinji

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第3号 2018年

別役実「愛のサーカス」を読む

An interpretation of Minoru Betuyaku's "Aino Circus"

山本欣司\*

YAMAMOTO, Kinji\*

要旨

別役実の短編小説「愛のサーカス」は、かつて中学校 1 年生向け国語教科書に掲載されていた、ユニークな内容の教材である（『新しい国語 1』、『新編新しい国語 1』東京書籍、平成二年度～十二年度）。十年以上のブランクを経て、平成二十六年度より高等学校向けの国語教科書に掲載されることとなった（『探求現代文 B』桐原書店、高校 3 年生配当）。なぜこのように配当学年が大きく変わったのか。それは「細部の発見」によって、小説の解釈が大きく変化したためだというのが本稿の主張である。これまで見すごされてきた「細部」（根拠）に着目することで、中心人物の一人である少年の人物像の理解が深まると同時に、それと連動する形で変化したラストシーンの論理的な説明が複雑であるため、配当学年が大きく変化したのではないかと主張した。

キーワード：別役実 「愛のサーカス」 国語科教育 教材研究 作品論

1

2009 年に教員免許状更新講習が始まったとき、地学教育を担当する同僚が、「理科の教科内容はどんどん更新されていくから、10 年に一度、現場の先生方に講習を受けていただくことには大きなメリットがある」と言った。それを聞いた私は驚き、学校で教える内容がコロコロ変わるなどということがあり得るのかと聞き返したのだが、その時の私の驚きというのは、「学校教育において、そんなことが許されるのか」といったニュアンスのものだったと記憶する。いま思えば私は、学校教育というものはスタティックな、揺るがない知識を伝えるものだという先入観を持っていたわけである。

しかし考えてみれば、私自身、子どもの頃は恐竜の絶滅理由をたんなる気候変動のためとしか教えられていなかったが、大学生になってから映画「ドラえもん」によって、巨大隕石の衝突説を知らされたという経験がある（おそらく「ドラえもん のび太と竜の騎士」、原作・脚本：藤子・F・不二雄、監督：芝山努、1987.3）。現在では恐竜の絶滅は、6500 万年前のユカタン半島沖・巨大隕石の衝突を契機とするのが定説であり、学校でもそのように教えられている。10 年に一度であっても、最新の知見を踏まえた講習の受講は、現場の理科教員にとって有益であるに違いない。

このように、理科の教科内容は事実の発見の積み重ねでできており、新たな発見が教科内容の刷新をもたらすことは理解しやすい。では、国語科の教材についてはどうであろう。一般には、たとえば小説の解釈というものについて固定的な、揺るがないイメージを持たれているのではないだろうか。

---

\* 日本語日本文学科教授

本稿で取り上げる別役実「愛のサーカス」は、教材解釈の変化・深化という問題を考える上で、興味深いサンプルである。この小説は、平成二年度から十二年度まで、中学校一年生向け国語教科書（『新しい国語1』、『新編新しい国語1』東京書籍）に掲載された後、十年以上のブランクを経て、平成二十六年より高等学校向けの国語教科書に掲載されることとなった（『探求現代文B』桐原書店）。後者においては、Ⅰ・Ⅱ部構成のⅡ部に配当されているため高校3年生向けとなり、「小説Ⅰ」という括りで梶井基次郎「檸檬」の次に配列されている。このように、全く同じ教材の配当学年が、中一から高三へというように大きく変わるといえるのは、どの教科でもあまり例のないことではないだろうか。

別役実の小説で、中学校国語教材として現在ポピュラーなのは「空中ブランコ乗りのキキ」であろうが、後に述べるように「愛のサーカス」は、ひねりの利いたユニークなストーリーによって、

安直な「成長」物語や似非「他者理解」の小説に馴らされた教師・生徒の価値観を逆撫でする役割をもつという意味では、きわめて貴重な存在といわなければなるまい。（千田洋幸）<sup>\*1</sup>

と評価された教材である。中学校教科書から姿を消したことについて、渋谷孝氏は「古くからの指導の型にはなじまない新教材は、教えるににくいという理由で否定される。生徒が興味を持つことは重視されない。」「『愛のサーカス』も大事にすべきだったと思う。」と述べており、授業での生徒の反応はよかったという<sup>\*2</sup>。しかし私は、中学校一年生を相手に、この教材で授業するのは、難しかっただろうと想像する。小説の解釈のわかる箇所があるにもかかわらず、一義的な解釈しか許容されていなかったからである。それが原因で中一の国語教科書から姿を消したのではないかと私は推察するのだが、ここからはまず、東京書籍『教師用指導書』<sup>\*3</sup>なども参考にしながら、中学校で当時どのような読解指導が行われていたのか検討していきたい。

\*

最初に、「愛のサーカス」のあらすじを紹介する。

夜の港町に、象と小さな象使いの少年を乗せたいかだが流れ着いた。発見者のウルじいさんは少年にどうしたのかと声をかけるが、にっこり笑いながら黙って沖を指差すばかり。あっちから来たのかと尋ねてもうなずきだけだった。やがて、噂を聞きつけた街の人々が大勢、港に集まった。互いに寄り添い不安そうにたたずむ少年と象に、人々は食事を世話した。少し恥ずかしそうに、慎ましく食事をする少年と象のしぐさや表情に心を打たれ、人々は「一つの奇跡が行われているかのように」息を殺して彼らを見守るのだった。

一方、ウルじいさんは当初かすかな疑問を抱く。サーカス一座を乗せた汽船が沖で難破したのではないかと考え、方々へ問い合わせたがそんな報告はなく、何も話さない少年は暗い沖を指差す以上の情報を与えてくれなかったからである。ウルじいさんは詳しく事情を聞こうとするが、街の人々に止められ、かわりに少年と象のために眠る場所を整える役目を担う。天使のような顔をした少年が、安心して眠りについたことをウルじいさんが伝えると、街の人々は心から喜び合った。

次の日から少年と象はその街で暮らした。彼らが「どこからどうやってきたのか」わからなかったが、街の人々にとってはもうどうでもいいことだった。少年と象のいたわり合う姿を見るだけで、人々は深く感動し「身も心もとろけそうになるくらい」幸せな気持ちになった。さらに彼らの寂しそうな姿は涙をさそい、少年のために優しくしてやりたいという人々の気持ちで、街全体が和やかになっていくのだった。

少年と象が現れて十一日目に突然、金星サーカス一座のクグ団長が大きな箱馬車であらわれた。彼は十日間の興行が終わり、料金を徴収に来たことを述べ、少年を一座のスターとして紹介する。団長は自信たっぷり、街の人々は少年のなにげない様子を見て感動したはずだと述べ、自分たちは「愛のサーカス」なのだと説明する。そして団長がフィナーレを宣言すると、少年の母親らしい若い美しい婦人が箱馬車から現れ、最高の笑顔を見せる少年としっかり抱き合うのであった。集まった人々は思わず涙を流し、大歓声をあげ、拍手を送った。

団長はウルじいさんに向かってずるそうに笑いながら、「何も知らない何もできない少年の純真な魂ほど感動的」なものはないのだと言い、人々からたつぷりと見物料をせしめると、少年と象を箱馬車に手荒く追いこみ、逃げられないように外から大きなかぎをがちゃんとかけ、いずこへともなく走り去った。

いかがだろうか。なによりも、ストーリーや登場人物に、読者が心を打たれないという点がユニークであるし、テーマも道徳的とはいいがたい。前半の心温まる物語が一転して、最後は生臭い金儲けの話になる。そのどんでん返しの後味が悪い。およそ「国語教育的」と思えない教材が、なにゆえ中一の教科書教材として選ばれたのか興味は尽きないが、この教材に対する生徒の反応として目につくのは、団長への強い反発である。東京書籍『教師用指導書』（前出）には、「参考」として「生徒の初発の感想」が掲載されている。「東京都内のある公立中学校一年生のクラスで、一読後に書かせた生徒の感想である」とのことだが、最初にあげられた、

象使いの少年が、喜ぶたびに港の人たちもうれしくなったりするのは、港の人たちがとても思いやりがあるからだと思った。だから、そういう人たちの気持ちを利用して商売する紳士がなんだか、とてもいやな人物に思えた。（女子）

という感想などが典型ではないだろうか。他にも、「最初私は突然シルクハットをかぶった紳士が、『お代です』と言った時、この少年を見せ物にしているなんてサギだと思った。（女子）」や、「お母さんをたてに子供を働かすのはよくないと思いました。（男子）」、「初めは『愛のサーカス』ってどういう意味だろうと思ったけれど、心が通じ合って和やかな日々を過ごせたことがサーカスなのだと思う。でもそういうことでお金を取るのはよくないと思う。愛の通じ合いには、お金なんていらなかった。（女子）」、「子供の純真な心を利用する紳士たちは、ひどいと思います。（女子）」などがある。

たしかに、金星サーカスは今回の興行で「たつぷりと見物料をせしめ」た。突然の団長の登場と、料金徴収がテンポよく続くことで、生徒達が戸惑いを覚え、「いやな」気持ちになったのも理解できる。クグ団長は、「純真な」少年を利用し、人々のまごころにつけ込んで金儲けをたくらむズルい大人として批判の的となっている。図式的に説明するなら、悪だくみに長けた団長 VS 親切心につけ込まれ騙された、善良な街の人々という感じではないだろうか。生徒の多くは街の人々に寄りそい、少年と象に同情しながら前半を読むため、最後に登場する団長に強い違和感・反発を抱くのである。

たとえば、この作品を用いて中学校一年生にディベートをさせようと考えた川井麻弥氏は<sup>4</sup>、初発の感想を発表させた後、あらかじめ準備しておいた「自分が街の人だったら、団長にお金を払うか払わないか。」という課題を提示した。ところが、生徒に意見を発表させるとともに確認すると、「払う派・一名、払わない派・三十九名という結果」となり、ディベート課題を見直さざるを得なくなったという。川井氏は、「意見の対立がほとんど見られなかった」。「好き嫌いの感情がはっきりしすぎて、その感情から抜け出せない生徒も多く見られた」と指摘し、『自分だったら』ということに重点を置きすぎたために、主観的な所で止まってしまって、それ以上には深まらなかったと分析している。

あるいは、この教材で授業を行った佐藤洋一氏は\*5、

一見、主題指導にしばられずに生徒の個性を生かした多様な読み方ができるようにとらえられている。／しかし、小学校までの動物と人間の心温まる物語やハッピーエンドの幸福感に包まれる展開の作品などに慣れてきた生徒にとって、後半の部分への違和感の強さは「納得のいかない作品」「読み終わっていやな感じが残った」「街の人々がお金を払ったことへの反発を感じた」などの感想に表れて

いると指摘する。生徒は団長に反感を持つあまり、おとなしく見物料を支払った街の人々にまで反発を感じるわけである。詐欺師を儲けさせるとは何ごとかと。作品の展開そのものを受け入れられない生徒が一定数いるのだ。

しかし実際のところ、街の人々が見物料を支払ってくれないなら、金星サーカスは興行を継続できない。反発されたら、食いつぶれてしまうのである。オープンスペースでの見物料の徴収は、任意であるが故に、観客の納得がなければ成立しない。

したがって、各地で興行を行いながら、現在の形にまで練り上げられてきた「愛のサーカス」が、どのようにして街の人々の違和感や反発を回避しているのかを考えることが、授業において欠かせないプロセスとなる。人々が見物料を支払うことは、この小説の大前提となっているため、本文の記述＝ストーリーを無視するような、「自分なら支払うか支払わないか」を議論することは、できることなら避けたいところである。

さて、金星サーカスの特徴を考える上で重要なポイントの一つは、秘匿性である。それが興行であることは、十一日目まで伏せられたままである。「愛のサーカス」は、少年のかわいらしさや健気さ、象との絆が町の人々を魅了する。観客は、彼らのいとしさに強く引きつけられるとともに、その孤独に同情し、何かをしなければならぬとの思いに駆られるのである。そのような仕組みに街の人々を巻き込むためには、それが興行＝シナリオや演出に基づいたショーであることを、十日間の興行期間中、気づかれてはならない。これは絶対である。

ただし、金星サーカスは詐欺団ではない。興行であることを最後まで隠蔽し、たとえば行方不明になった少年を探し求めてこの港町へたどり着いた「母親」が少年と再会を果たした後、帰郷のための旅費の援助を求めるといった方法、あるいは「母親」を登場させず、アニメ「母を訪ねて三千里」\*6のように少年が一人旅の途中で町に流れ着いたという「お話」にしておいて、それを知った善意の第三者が寄付を募るといった方法で、金儲けを行うことも可能だと思われるが、彼らはそうはしない。騙して金を巻き上げたわけではないのである。十一日目に堂々と、団長が人々の前で興行＝ショーであることを宣言した上で、「それではフィナーレです」とのかけ声とともに、少年と「母親」との再会というクライマックスシーンを披露し、その上で見物料を徴収しているのである。

なぜ「フィナーレ」の前に正直に興行であることを示されてもなお、少年と「母親」の抱擁を見た人々は涙を流して感動し、見物料を支払うのであろうか。「愛のサーカス」のビジネスモデルとはどのようなものか。街の人々は騙されたまま、洗脳された状態のままで、たっぷりと見物料を支払っているのだろうか。もちろん、事態はそう単純ではない。根拠に基づく国語の読解の授業として当然といえば当然ではあるが、人々の「加担性」の発見に生徒を導くことが肝要である\*7。

金星サーカスの興行は、人々（観客）をうまく巻き込み、少年の味方につけない限り成功しない。人々の加担がなければ成り立たないのである。暗い沖から漂着した「象と、小さな象使いの少年」を、街の人々は警察に委ねない。そして、少年と象が「どこからどうやってきたのか」不明であるにもかかわらず、人々は「もうそういうはどうでもいいことでした」とあるように事情を考慮の外に置き、

少年と象を自分たちの手元に置いて世話をし、いつくしみ続けたいと願うのである。極端な話、もしこれがウルじいさんが当初予想したように、「サーカスの一座を乗せた汽船が沖で難破して、少年と象だけがその港に流れ着いたのだ」とすれば、海難事故に乗じた未成年者誘拐事件だと判断されても仕方のない事案である。

街の人々はなぜそのような行動をとったのか。それは、一目見た時から少年の魅力の虜になり、思考停止に陥ったからだとも判断せざるを得ない。最初の晩、彼が食事をするだけで、「人々は、まるでそこで一つの奇跡が行われているかのように、少年と象のほんのちょっとしたしぐさや表情にいちいち感動しながら、息を殺してそれを見守っておりました。」とある。暗い沖合からいかだで漂着し、保護者の見当たらない小さな少年＝迷子が食事をとる姿を、人々は心配や不安ではなく、感動の気持ちをもって眺めるのである。また、少年と象の「いたわり合う姿を見ているだけで、街の人々は深く感動し合う」とあり、少年の笑顔に「人々はまるで、身も心もとろけそうになるくらい、幸せな気分になる」という過剰な反応を示す。さらに、少年の寂しそうな姿に触発されて、「少年のために優しくしてやりたいという街の人々の気持ちが、しだいに広がって、街全体が和やかになってゆくようでした」とある。リアルに想像してみるなら、少年の魅力の虜となっていく人々の様子は異様である。何かに取り憑かれ、狂気に陥いる群衆を描いたホラー映画のようではないだろうか。彼らを単純に、被害者扱いすることはできない。

行方不明となった少年の帰りを待つ家族の存在やその悲嘆に対する想像力は失われている。目の前の少年を手放すことは考えられなくなり、人々は保護者のように振る舞おうとする。冷静な判断力を失い、いつまでも応援したくなつたわけである。アイドルに熱狂するファンのような心理状態といえ、生徒にも理解しやすいのであろうか。恋に盲目になるような、そんな異様な集団心理が街を支配しているのである。人々は少年に魅了され、だからこそ、たとえそれが興行で、シナリオや演出が介在している可能性があろうとも、「フィナーレ」に激しく感動し、見物料をたっぷり支払わずにはいられないのである。団長の役割は、アイドルグループを創出し、ファンから大金を搾り取る敏腕プロデューサーのようなものである。腹黒いのは確かだが、詐欺師と呼ぶことはできないだろう。意表を突いたショービジネスには違いないが。

初日の晩、ウルじいさんは冷静に事態に対処しようとした\*8。彼の異質性はわかりやすい形で描かれているため、本来なら生徒自身がウルじいさんとの対比によって、街の人々の陥ったヒステリックな状況に気づき、そこから人々の思考停止状態の意味（加担性）にまで、考えが及ぶことがベストである。しかし、生徒の初発の感想を見る限り、街の人々の把握が浅いレベルに留まっていることは彼らの読解の特徴としてあげなければならない。ウルじいさんと他の人々との違いに触れる生徒も多くない。だからこそ実際の授業では（注7参照）、ウルじいさんとの対比を契機として、街の人々の「加担性」発見をうながす問いかけが行われていたと考えられる。

\*

さて、団長があこぎな商売人であることは確かだろうし、街の人々が金星サーカスのビジネスに自分から乗せられてしまったことも明らかになったが、まだ検討していない人物がいる。少年である。実践報告を見る限り、ピピ少年に関する検討はあまり見られず、「純真」でかわい存在として扱われていたのではないだろうか。おそらくそれは、ラストシーンにおける監禁のイメージが強い影響を及ぼしている。

金星サーカスの紳士は集まった人々からたつぷりと見物料をせしめ、少年と象を箱馬車に手荒く追いこみ、逃げられないように外から大きなかぎをがちゃんとかけると、そのままいずこへ

ともなく、走り去っていきました。

母親を人質に取られ、無理矢理に団長の命令に従わされている弱者として少年をとらえることには、明確な根拠がある。興行が終わるやいなや自由を奪われたところから、服従を強いられた気の毒な人物として少年を捉えることを否定することはできないだろう。そのため、教室では最終的に、腹黒くあこぎな団長 VS 主体的にサーカス一座のビジネスに加担してしまった街の人々 VS 弱者としての少年・母親・象という三者関係の描かれた小説として、この教材は解釈されてきたのである。生徒の初発の感想を見ても、「この少年と象もサーカスの人に支配されているように感じる」（1年男子）や、「少年は確かに色んな人に感動を与えていたけれど、最後に紳士がお金を取っていかけてしかも少年と象と少年の母親は紳士に奴隷のように扱われていると思いました。」（1年女子）というように、最終段落を根拠に、団長と少年・「母親」の関係性を理解している\*9。他方、教師の側も佐藤洋一氏（前出）は団長を「〈支配者〉」、少年と「母親」を「〈被支配者〉」として説明する。なによりも東京書籍『教師用指導書』自体が（前出）、「母子は猿回しの猿、操り人形の人形であり、団長にとっては金の卵を産む鶏にすぎない」、「母子を残酷に引き離すことで生まれる『愛のサーカス』とは何なのか」と指摘しているわけである。

とはいえ、少年の「純粋な魂」を信じ、「愛のサーカス」への積極的関与を否定するのは容易ではない。次章で詳述するが、なんといっても彼は「金星サーカス一座のスター」である。少年の主体的な協力がなかったなら、興行があればほどの成功を収めることは困難だと考えられるのである。次の街でも少年は素晴らしい演技を繰り返すに違いない。初読の段階で、直観的に少年のうさん臭さを感じとった生徒もいたのではないだろうか。

この教材の定番化を阻む要素が那邊にあったかは定かではない。東京書籍がなぜ十年で教材を差し替えてしまったのかはわからない。しかし、ラストシーンの監禁のイメージは強烈であるものの、少年の積極的関与を思わせる要素もあるため、この矛盾を解消しない限り授業は不安定になる。渋谷孝氏\*10のように、「ピピ少年もクグ団長との『同じ穴の貉』なのである」と指摘するだけではむしろ、混乱を招くだけであろう。そのような解釈を提示した場合、当然のこととしてラストシーン（監禁）との整合性が問われ、説明が求められるわけであるから。ことは教材理解＝人物やストーリー把握の本質に関わるため、教師が教室で立ち往生しかねないやっかいな問題を抱えた教材は、たとえユニークな内容であったとしても、消えていくしかなかったのではないだろうか。

### 3

最初にふれたように、小説の解釈も更新されることが往々にしてある。文学研究の場でいえば、樋口一葉「たけくらべ」や夏目漱石「こころ」をめぐる論争が想起されるが、国語教育の場でも同じことである。それは、ひとつの小説がまったく異なるコンテクストに置かれて読み直されることによる場合もあるが、頻繁に起こり得るのはむしろ、「細部の発見」による場合である。簡単なことではないが、何年も何十年も読みつがれていくさなかに、本文中から読みかえの根拠となる箇所が見つかることがある。大きな読みかえにつながる問題提起がなされた場合は論争になる。かつて中学校一年生の教科書に掲載されていた「愛のサーカス」が、高校三年生の教科書に掲載されることになったのも、少年にまつわる、ある発見が契機となったのではないかと推察される。

平成 26 年度版の桐原書店『教師用指導書』\*11には、団長が登場した後の、「紳士が伸ばしたステッキの先に、……おじぎをしました」のくだりについて、次のような指摘がある。

まるでカーテンコールで挨拶する役者のように、第三倉庫から出てきて街の人々におじぎをする少年は、ほぼ間違いなくサーカス団の団員としての役割を忠実に果たしてきたと言ってよいだろう。つまり、この十日間にこの港街で食事したことも、ほほ笑んだことも、寂しそうにしたことも全部、おそらくは演技だったと考えられるのである。そうなれば、これに続く感動的な母親との再会シーンや、手荒く箱馬車に閉じ込められる意外なラストシーンさえも、クグ団長の手の込んだ演出だと取ることができないだろうか。

少年像に関する重要な根拠の指摘である。十一日目に港街へ乗り込んできた団長は、現れて早々に、迷うことなく第三倉庫をステッキで指し示し、「金星サーカス一座のスター、象使いのピピ少年を紹介します。」と街の人々に呼びかける。象も一緒に暮らせるという理由でたまたま少年はそこに寝泊まりしていたわけであるが、団長の紹介と同時に、「その中からゆっくり、少年と象が出て」くる。ということは、街に来たばかりだというのに団長は、そこに少年がいることをあらかじめ知っていたことになる。また、団長は自信たっぷりに「皆さんは、あの子を見ました。そして、感動しました。」と断言する。いつものことであるから、よほど自信があるのかもしれないが、さらに、少年がこの港町でしたのが「寝て、起きて、食事をして、お散歩をして、空を見て、海を見ただけ」であること。にもかかわらず「皆さんはそれを見て、感動したはずですよ。」と確信を持って語る。この指摘があまりに的確であることもまた、何らかの形で（こっそり前夜にでも）、事前の打ち合わせが行われたことを想像させるものである。

「天使のような顔」やいたいけな様子といった希有な特徴を武器に、少年は練り上げられたシナリオと演出にしたがって、十日間の興行を成功裏に終えることができた\*12。興行であることを誰にも気取られることなく、少年は狙い通りの結果（人々の熱狂）を残したわけである。そして「金星サーカス一座のスター」として、一片の罪悪感も示すことなく「フィナーレ」に至るまで、「純真な魂」を持つ少年の役を演じきったことから、彼の演技力はかなり高度なものだと考えられる。これからも高齢者の多い街を巡り（「愛のサーカス」に、少年を遊びに誘う子どもは一人も登場しない）、喝采を浴び続けることだろう。

桐原書店『教師用指導書』の指摘通り、少年の主體的な関与、サーカス団員としての強い自覚がなければ、あれほどまでの興行の成功は望めないと考えられる。脅迫され強制的に手伝わされていると解釈するのは無理があるのだ。団長や「若い美しい婦人」との連携も見事で、少年は文字通り「金星サーカス一座のスター」としての務めを全うしたのである。

しかし、それならばなぜ、ラストシーンで少年と象は監禁されなければならないのか。団長はわざわざ、逃げ出すはずもない仲間を街の人々の見ている前で、どうして手荒く扱ったのだろうか。

この問いを解くためには、街の人々の反応を想像することが必要である。自分たちがあれほどいとおしく思い、大切にしてきた少年と象を、団長が目の前で乱暴に扱ったわけであるから、人々は当然、反発するはずである。生徒の初発の感想と同様に、「団長はひどいやつだ、純真な少年を商品のように扱って」と憤りを覚えるとともに、少年への同情心もよみがえってくるだろう。

冷静に考えるなら、この十日間、人々は「天使のような顔」をした少年（名子役）に一杯食わされ続けてきたわけである。夢（熱狂）から覚めたとき、嫌な気持ちになる人も当然いるに違いない。だが、少年と象が監禁される様子を目の当たりにした街の人々は、少年は悪くない、腹黒い団長に無理強いされていたのだとの解釈の枠組を手に入れたことになる。それにより、人々の記憶の中の少年は、美しいままでいられる。「少年の純真な魂」という幻想は守られる。団長はそこまでの配慮を持って、「愛のサーカス」を運営しているのである。少年のイメージの毀損を最小限に留めるには、団長が悪

者になるのが一番なのだ。監禁までが「愛のサーカス」の演出なのである。

本文に明確に示された根拠（監禁）を、別の根拠によって覆すというのは骨の折れる作業であり、教室では精度が高く、説得力のある論理的な説明が求められる。桐原書店「学習の手引き 発展4」にしめされた\*13、

『少年と象を箱馬車に手荒く追い込み、逃げられないように外から大きな鍵をがちゃんとかけ』（二二九・2）とあるが、この部分からどのようなことが想像できるか、まとめてみよう。」という課題は、そのような問題として捉えることができる。そういった難問に生徒が取り組むこと自体は、複雑化した現代社会を生き抜くための、課題解決型の読解力育成という意味で、たいへん意義深いものである。だが、さまざまな学力の生徒を前に、そのような授業を展開するのは容易ではない。生徒の発達段階とのマッチングが重要であろう。おそらく桐原書店は、大きく方向の異なる解釈が可能な小説のラストシーンを、生徒自身に深く考えさせるために、配当学年を高校三年生としたのではないだろうか。

#### 4

ラストシーンで団長は、「少年と象を箱馬車に手荒く追いこみ、逃げられないように外から大きなかぎをがちゃんとかけると、そのままいずこへともなく、走り去っていった。「四頭立ての大きな黒い箱馬車」は、うずくまってもなお「山のよう」に大きい象を運搬するためのものだったわけである。

ここで見逃してはならないのは、ラストシーンで「若い美しい婦人」が、少年とともに監禁されたわけではないことである。婦人はどこに乗ったのであろうか。馬車を操る団長とともに、御者台に並んで腰を下ろしていると考えられるしかあるまい。おそらくは微笑みを浮かべ、街の人々に手を振りながら。

そして港町を離れたなら、象と一緒に狭い箱馬車の中にいるのは危険であるため、少年は外に出され、仲間とともに御者台に腰掛けるのではないだろうか。この、団長・婦人・少年が一列に並んだ様子を想像したとき、私にはそれがひとつの家族に思えてならない。家族水入らずで興行を行う「愛のサーカス」は、次の街（カモ）を目指してこれからも旅を続けるのである。

#### 注・引用文献

- \*1 千田洋幸「文学教材論の前提 ―三つの『サーカス』に触れながら」『月刊国語教育』2002.5
- \*2 渋谷孝・田中実・須貝千里「文学教育批判の根拠―作品はどこにあるか」『文学の力×教材の力 理論編』教育出版、2001.6
- \*3 新編新しい国語編集委員会、東京書籍株式会社編集部『新編新しい国語：教師用指導書 研究編下』東京書籍、1997
- \*4 川井麻弥・立井万喜「中学校授業実践報告 討論による文学作品の指導」『愛媛国文と教育』26号、1994.10
- \*5 佐藤洋一「愛のサーカス」：渋谷孝・市毛勝雄編『〔中学校編〕第2巻 愛のサーカス』（「実践言語技術教育シリーズ」）明治図書、1997.8所収、85頁
- \*6 「母を訪ねて三千里」（原作：エドモンド・デ・アミーチス、監督：高畑勲、制作：日本アニメーション・フジテレビ、1976）
- \*7 たとえば、「これからの教育実習―国語科における観察実習の研究（1）―」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』39号、2011.3（示範授業は村山太郎教諭）
- \*8 ウルじいさんが冷静な人物であるのは間違いないが、彼とて、少年に魅了された人間の一人には違いない。初日の晩に、寝床に横たわる「少年の天使のような顔」を目にしたウルじいさんは、「眠りました。だいじょうぶですよ。とても優しい顔をして、まるで心配なことは何もないみたいだに……。」と語り、集まった人々を喜ばしている。二日目から団長が登場するまでの間、ウルじいさんが登場しなくなるのは、彼もまた少年のファンの一人になってしまったことを示しているのではないかと。

- 
- \*9 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要 2011 これからの教育実習—国語科における観察実習の研究 (1) —資料集』(広島大学研究科国語文化教育学講座・広島大学附属福山中・高等学校国語科共編、2010.3 授業者は村山太郎教諭)
- \*10 佐藤洋一氏の授業実践に対する渋谷孝氏のコメント：渋谷孝・市毛勝雄編『〔中学校編〕第2巻 愛のサーカス』(「実践言語技術教育シリーズ」) 明治図書、1997.8 所収、90 頁
- \*11 『探求現代文B 教師用指導書』桐原書店、2014、84 頁
- \*12 街の人々がつねに、弱者に対して優しいわけではないことは、小説の冒頭に「やせた野良犬」が登場することから明らかだろう。身も蓋もない話だが、少年がもし「天使のような顔」でなければ、人々はもっと冷静に対処したはずである。
- \*13 『探求現代文B』桐原書店、2014.2、229 頁